ー メコンオオナマズを語るー

第 2 回

大きなナマズのミニシンポジウム

一般公開シンポジウム

メコンオオナマズ学術調査委員会

アクア・トト ぎふ
岐阜県世界淡水魚園水族館

もくじ

シンポジウムスケジュール・・・・・・・・・1
講演者紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・2
講演要旨・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

シンポジウムスケジュール

10：00～10：10　開会挨拶

小早川　みどり（メコンオオナマズ学術調査委員会 会長）

10：10～11：50　講演

「タイ国におけるプラーブック（メコンオオナマズ）をめぐる現状」
プラチヤー・ムシカシントーン（カセサート大学水産学部　准教授）
ウイチアン・マグトゥーン（スリナカリンウィロット大学理学部　准教授）

「メコンオオナマズは生き残れるか　本流ダム計画が進むメコン川の未来」
新村　安雄（フォトエコロジスト）

「メコンオオナマズから学ぶこと」
池谷　幸樹（岐阜県世界淡水魚園水族館 学芸員）

11：50～12：20　総合討論

コーディネーター　小早川　みどり
パネリスト　プラチヤー・ムシカシントーン
ウイチアン・マグトゥーン
新村　安雄
池谷幸樹

12：20～12：30　閉会挨拶

多紀　保彦（自然環境研究センター・東京水産大学 名誉教授）

講演者紹介

プラチヤー・ムシカシントーン

1965年にインドのニューデリーにて生まれる。幼少期を横浜とバンコクで過ごす。少年時代に雨季のバンコクで魚を追った経験から魚類学を志す。
バンコクで高校を卒業した後、東京水産大学（現東京海洋大学）資源育成学科に留学、同大学院を修了。水産学博士。
現在、タイ国立カセサート大学水産学部水産生物学科准教授。
専攻は魚類学。研究テーマは南・東南アジア地域の淡水魚の分類学。

主な著書として
Grzimek's Animal Life Encyclopedia 2nd Edition. Volumes 4-5, Fishes I-II (Gale Group)
食材魚貝大百科　（平凡社）など。

新村　安雄（にいむら　やすお）

昭和２９年生まれ　静岡県出身
愛媛大学大学院卒業　理学修士（水域生態学専攻）

フォト・エコロジスト、リバーリバイバル研究所・サツキマス研究会代表
水中に棲む生物の視座から、長良川、琵琶湖、メコン川を主なフィールドに生き物と人間の係わりを研究している。
WWFジャパンのDVD作品「淡海と生きる」の撮影構成、琵琶湖博物館の企画展などで琵琶湖とのかかわりは深い。

著書等

・長良川の一日	（共著）	山と渓谷社
・日本の淡水魚	（写真提供）	山と渓谷社
・魚からみた水環境	（共著）	信山社サイキック
・鮎百河川	（撮影）	釣り人社

池谷　幸樹（いけや　こうき）

昭和４６年生まれ
北海道大学水産学研究科修士課程修了　学芸員

株式会社江ノ島マリンコーポレーションに入社し、平成16年5月より岐阜県世界淡水魚園水族館勤務。

メコンオオナマズに関する研究発表

■「水槽飼育下で観察されたメコンオオナマズ*Pangasianodon gigas*の摂餌周期」Feeding cycle of the Mekong giant catfish, *Pangasianodon gigas* , in the Aquarium 池谷幸樹、波多野順、谷村俊介、堀由紀子 2007年度日本魚類学会年会（平成１９年）
■「水槽飼育下におけるメコンオオナマズ *Pangasianodon gigas* の頭部体色変化」Head color change of Mekong giant catfish, *Pangasianodon gigas,* in the Aquarium　波多野順、池谷幸樹、谷村俊介、堀由紀子　2007年度日本魚類学会年会（平成１９年）
■「メコンオオナマズの輸送と、飼育下で得られたいくつかの知見について」　池谷幸樹、堀由紀子、谷村俊介、竹嶋徹夫、堀江俊介、波多野順、眞鍋美智子 第５０回水族館飼育技術者研究会（平成１８年）

講演要旨

「タイ国におけるプラーブック（メコンオオナマズ）をめぐる現状」

プラチヤー・ムシカシントーン（カセサート大学水産学部　准教授）
ウイチアン・マグトゥーン（スリナカリンウィロット大学理学部　准教授）

メコンオオナマズ（*Pangasianodon gigas*）(図１)はインドシナのメコン川に固有な世界最大の淡水魚の一種である。

タイではメコンオオナマズはプラーブック（プラーは魚、ブックは頑強という意味）の名で呼ばれ、インドシナを象徴する大河メコンの希少種として一般的にも広く知られている。産卵を含む本種の生態はいまだにほとんど解明されていない。

年々減少する本種の捕獲数はその因果関係が不明確なのにもかかわらず、中国によるメコン川本流での複数のダム建設などメコン川の環境破壊のわかりやすいパラメーターとしてマスメディアに頻繁に登場してきた。しかし、国際自然保護連合（IUCN）やワシントン条約（CITES）によって保護され、世界的にも最も希少な淡水魚の一種である本種の自然界での捕獲量の著しい減少とはうらはらに、人工授精による第一世代を親として人為的に生産された第二世代が広く国内で流通した結果、近年、皮肉にもプラーブックはタイ人にとって以前よりもはるかに〝身近〟な存在となっている。以前は特定のレストランで稀にしか食することができなかったプラーブックも今では巷の多くのレストランで日常的にオーダーすることができる。また、大型の釣り堀や貯水池、ダム湖などに放流され、ゲームフィッシングの対象魚しても人気が高い。一方、以前はタイ東北部のメコン川流域でプラーブック漁をしていた漁師たちがプラーブックが放流されたダム湖などに〝出稼ぎ〟にいくという奇妙な現象もおこっている。

さらに、プラーブックと近縁種のプラーサワーイ（*Pangasianodon hypophthalmus*）の交雑個体も多く生産されており、ビックワーイ（ビッグは大きい、ワーイはサワーイの略称）と呼ばれ食材としても釣りの対象魚としても流通している。本交雑個体の自然水域への養殖池などからの流入及び人為的な放流によりプラーブック及びプラーサワーイの自然個体群との交雑が起き、遺伝的かく乱が生じることが懸念される。

一方、タイ水産局はタイ国内の主に大型ダム湖などでプラーブックの放流をくりかえし行い、本種のメコン川流域以外での自然繁殖をもくろんできた。本種のメコン川流域以外での自然繁殖はまだ確認されていないが、本来はメコン川の固有種であるプラーブックを他の河川流域に放流することは放流された水域の生態系をかく乱する可能性があるばかりでなく、自然水域での生息状況が不明確な前述の近縁種プラーサワーイの地域個体群との交雑も予想され将来深刻な生物学的問題を引き起こす可能性がある。２００９年１０月からタイ国内の特定の養殖場からプラーブックの養殖個体の海外への輸出も許可された。十数年後、 自然界からプラーブックが絶滅し、世界中で人為的に生産されたプラーブックが 普通に見られる時代がやってくるかもしれない。

これら上記のプラーブックを巡る諸事情の予期せぬ展開が示唆するのは本種はもはや〝保護の必要な絶滅危惧種〟という一元的な価値観でとらえきれる存在ではなくなっているという事実であり、今後、放流の適度な規制なども含めてその存在をとらえなおす必要がある。

図1.　タイ国チェンライ県のメコン川本流で捕獲されたプラーブック
（1990年5月2日のタイ英字紙　Bangkok Postより転載）

「メコンオオナマズは生き残れるか　本流ダム計画が進むメコン川の未来」

新村　安雄（フォトエコロジスト）

〇世界で一番豊かな魚の川

メコン川はチベット高原を源流とする総延長4425ｋｍ（4023ｋｍという説も）、インドシナ半島の6ヶ国（＋チベット）を流れる国際河川です。流路延長では世界第10位。流域面積では世界最大のアマゾン川の十分の１に過ぎません。ところが、世界最大の生物多様性をもち流域におよそ2､000種の魚類が生息するというアマゾン川についで1､200種類以上もの魚類が生息しています。そして、メコン川を特徴付けているのは流域に暮らす数千万の人々が、魚類などメコン川の豊かな自然の恵みを受けて生活しています。

〇建設が進む本流ダム

メコン川の流域ではこの十年の間に、少なくとも1068種類、2008年わずか１年間で163種もの動植物の新種が発見されたと世界自然保護基金（WWF）は報告しています。一週間に2種の新しい動植物が発見されているということは、もちろんメコン河流域の豊かさ＝生物多様性を示しています。しかしながら新たに発見された動植物は、ダム建設を目的に行われた生物調査によるという現実があります。

メコン川の支流にはすでに多くのダムが建設されてきましたが、国際河川であるメコン川の本流にダムは建設されてきませんでした。しかし、上流に位置する中国でのダム建設に続くように、今、メコン川本流では多くのダムが建設され、また計画が進められようとしています。

〇メコンのおさかな回廊　フーサホン

メコン川では雨季と乾季では大きく川の水位が変動します。それに伴って、雨季には下流に、乾季となると上流へと多くの魚たちが移動をします。メコン川ではこの大きな魚の移動経路が上流から3つの地域に分かれるといわれています。主に中国に属する上流部分を除いて、下流側の2つの地域が分かれているのは、その場所でメコン川は大きく「折れ曲がっている」つまり、大きな滝によって落差が生じていることが理由の一つです。

ラオス国内、カンボジアと国境を接するこの地域は、4000を越えるという島（川中島）が連なり、メコン川を数え切れない流れ（分流）に分けています。その流れにはそれぞれ落差があり、大小の滝となって流れ落ちて下流で再び一本のメコン川となります。

その数え切れなく分かれた中の、たった1本の流れが今日紹介するフーサホンです。

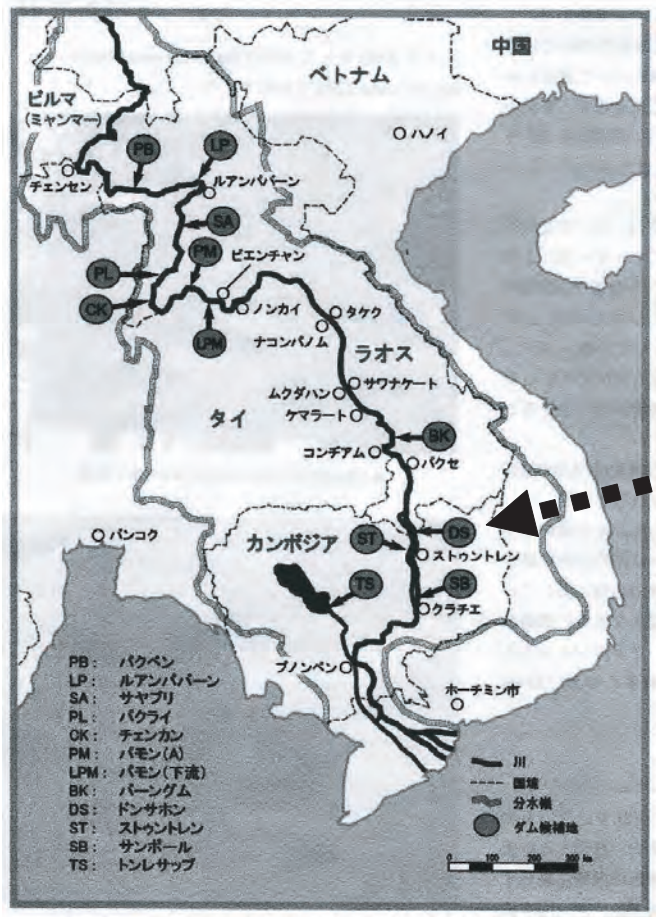
ラオス語でフーというのは、水路、分流という意味、サホンというのはその水路に面した島の名前です。落差がほとんど無いフーサホンはまさに「魚たちの回廊（かいろう）」、自然が創り出した「天然魚道」です。この「回廊」によって、魚たちは産卵する場所に移動し、また生息の場所を広げ、おおきく成長して豊かなメコン川を形作ってきました。しかし、このフーサホンにもダムが計画されています。

もしダムが完成すると、メコン川を移動する魚たちが通ることが出来るほとんど唯一といえる回廊が無くなってしまいます。そして、広くメコン川の上下流域を生息の場所としているメコンオオナマズにとっては、まさしく、生存の危機が迫っています。

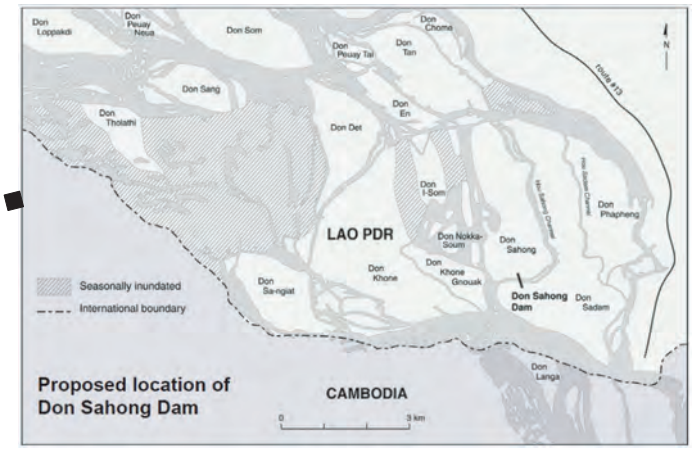
昨年私は、まさにダム建設計画の場所で、メコンオオナマズと出会いました。

計画されているメコン川本流ダム

「メコンウオッチ　フォーラムめこん　Vol.9 No.1
（2008.3.31発行）メコン本流ダム開発より」



フーサホンの場所　ドンサホンダム計画地
「World Fish Center 2007」



メコンオオナマズ撮影の新聞記事
「朝日新聞　2009年11月12日中部版」

朝日新聞　2009年（平成21年）11月12日　木曜

ダム建設予定地にメコンオオナマズ

ラオスで岐阜の写真家撮影

世界最大級の淡水魚で、東南アジアのメコン川流域にのみ生息する絶滅危惧種の「メコンオオナマズ」＝写真＝がこのほど、ラオス南部のダム建設予定地で確認され、写真家の新村安雄さん（岐阜市在住）が撮影に成功した。

絶滅危惧種 生態系への影響懸念

メコンオオナマズは乱獲や開発で数が減少。野生の大型のものは年に数匹しか見つからないといい、研究目的以外の輸出入が禁じられている。

魚類調査でラオス南部のメコン川本流などを訪れていた先月、伝統漁法のやなに体長約2・5メートル、推定体重約200キロのメコンオオナマズが偶然かかり撮影したが、間もなく死に、地元水産局に引き取られた。

長良川でサツキマスの調査を20年あまり続けている新村さんは「メコン川が、河口堰の建設問題で揺れた長良川と重なって見える」と語る。ダムが建設されるとメコン川に生息する魚は回遊経路がせき止められ、生態系への影響が心配されるという。

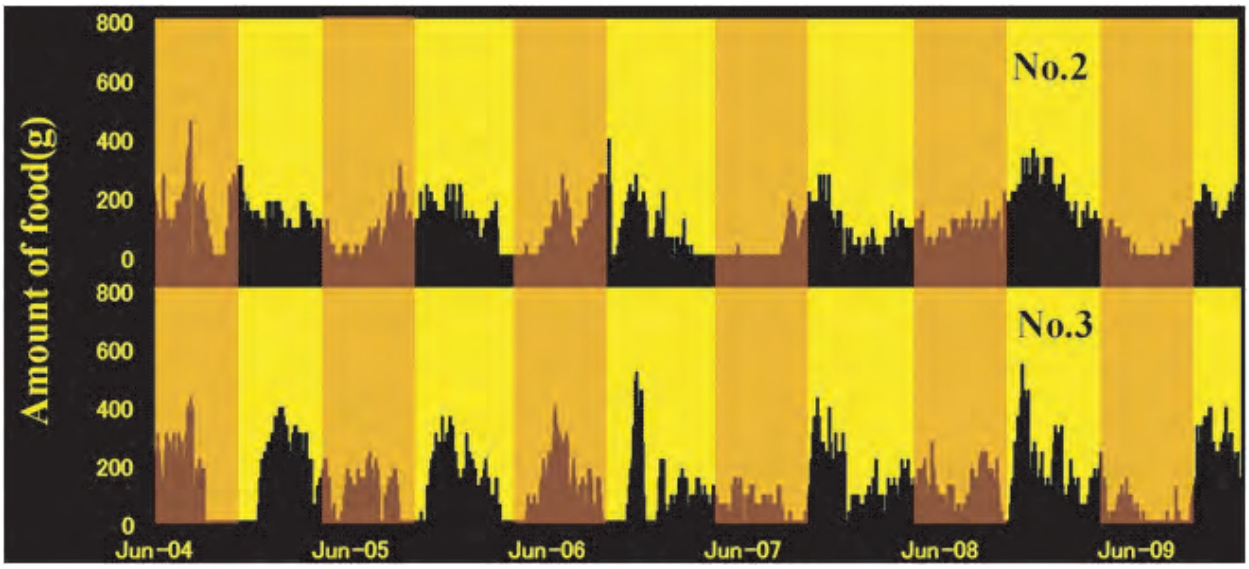
研究のため、タイで人工孵化させたメコンオオナマズ6匹（体長約1・5メートル）を飼育している岐阜県世界淡水魚園水族館「アクア・トトぎふ」の池谷幸樹飼育員は「ダム建設予定地で見つかった意味は大きい。貴重な場所として保全すべきだ」と話す。

「メコンオオナマズから学ぶこと」

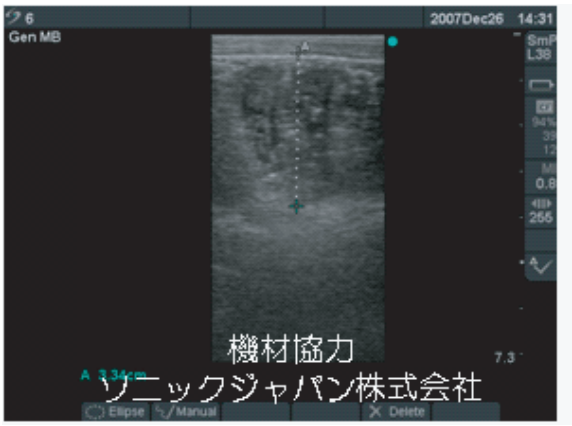
池谷　幸樹（岐阜県世界淡水魚園水族館 学芸員）

アクア・トトぎふでは2004年の5月から、6個体のメコンオオナマズをタイの水産局より研究目的で寄贈され飼育している。絶滅危惧種であり、日本では長崎ペンギン水族館での飼育例があるのみで、すべてにおいて手探り状態での飼育から6年が経過した。その間にメコンオオナマズの摂餌周期性の発見、超音波診断による雌雄判別の有用性、メコンオオナマズの発音周期など様々な知見が収集された。メコンオオナマズを生かし、展示したまま調べるといった条件付きで研究してきた結果、独創的なアイデアが生まれこれらの知見を収集することができた。メコンオオナマズを飼育することで飼育員としての考え方や発想が大きく変わり、その後の水族館飼育に大変役立っている。

水族館は研究機関ではないものの、水族館でなければ追及できない研究があることをメコンオオナマズから学び、そういった視点で飼育生物を見ると、まさに水族館は研究材料の宝庫であると感じている。そして研究と同時に普及啓発を行うことができる水族館の可能性を今後さらに追及していきたい。



２個体のメコンオオナマズの毎日の摂餌量を表したグラフ
（灰色部分はメコン川の雨季に相当）



メコンオオナマズの
腹部の超音波画像

水槽で餌を食べる
メコンオオナマズ

MEMO